

「スタートアップセミナー」を学生はどう受け止めたか

ー2012年度の児童教育学科の試みー

吉田 直子・古市 真智子・味岡 ゆい・長尾 寛子

1 問題と目的

1.1 初年次教育概観

従来から、大学で何をどう学ぶかについては、大学を目指す若者を対象とした多くの指南書があり（たとえば、隅谷、1981）、それらは、高等学校よりはるかに自由度の高い学問の府に入門する若者、新入生たちへの道案内の役割を果たしてきた。しかし高等教育機関への進学率は急速に上昇しており、文部科学省の学校基本調査によれば、2007年度の高等教育機関への進学率は55.3%になり、学生の実態や大学に対するニーズが多様化してきた。そこで大学では、新入生に対するよりきめ細かな大学への導入教育や学生生活への支援の必要性が自覚され、様々な取組みが実施されるようになってきた（高松、2008）。山田（2012）によれば、初年次教育の実施率は2001年の調査では80.9%、2007年には97.0%となり、内容や方法に課題はあるものの、今日ではほとんどの大学が実施するようになっている。

これらは、初期には導入教育や一年次教育ともよばれてきたが、2000年代の後半には初年次教育という概念が定着した。たとえば中央教育審議会の2008年答申では初年次教育とは、「一般に高等学校から大学への円滑な移行を図り、学習および人格的成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と明記されている（山田、2012、類似のものに濱名・川嶋、2006）。具体的には、「レポート、論文などの文章技法」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」「学問や大学教育全般の動機づけ」「論理的思考や問題発見、解決能力の向上」「図書館利用や文献検索の方法」が位置づけられている。また自校教育などを含む考え方もある。

実際には大学によって、初年次教育の内容や実施スタイルは異なっている。我が国の私立大学の初年次教育の動向調査（杉谷、2006）によると、新入生の学力不足や外国語などの学力を補う補習型や入学後のスタディスキルを重視するスキル型、情報リテラシーを重視する型、学問や大学教育への動機づけや適応を目指すオリエンテーション型、大学教育の基礎・概論型や

それらの混合型などがある。また実施方法にも多くの課題（指導体制から教員の熱意まで）がある。そもそも初年次教育研究という専門分野はまだ発展途上であり、その分野に精通しているとは言えない多くの教員がこれを担当する必要があるところに、初年次教育の難しさがあるといえそうである。

1.2 本学の初年次教育の目標

本学では、2010年より初年次教育科目の「核」として「スタートアップセミナー」という科目が位置づけられた。これは全学部全学科の新入生に対する必修科目である。本学の初年次教育としての「スタートアップセミナー」の意図するところは、そこで扱われる、大学の建学の精神、教育目的、大学での学び方などについてのさまざまな知識や経験が、学習意欲や大学生生活の適応性を高め、他の科目への導入となることである。そのため「スタートアップセミナー」は、すべての学部学科の教育目的につながる基礎的な科目とされ、共通教材も用意されている（中部大学全学共通教育部初年次教育科、2012）。一方シラバス作成や運用は、一定の共通項を含むことを条件に各学科に任されている。

1.3 児童教育学科の初年次教育の目標

児童教育学科は、教育学関連科目等の総合的な学びをとおして社会に貢献する人間を育てることを目的としており、学科創設以来その特色に沿って初年次教育を実施し、一定の役割を果たしてきた（中部大学現代教育学部スカイアップ委員会、2009、2010、2011、2012）。

過去4年間の児童教育学科の初年次教育の特徴は、所属学部のもう一つの学科である幼児教育学科の教員と協働し、合議による独自のプログラムを用いて始まったことである。この時期には大学の初年次教育科目が始まっていなかったため、学部独自に「スカイアップ・プログラム」とした。そして3年目から大学の初年次教育科目名である「スタートアップセミナー」が始まり、児童教育学科もそれになった。最初の2年間の児童教育学科の初年次教育についてはその実施内容の検討や学生、教員の授業評価に関する調査も並行して

行われた（早矢仕・太田、2009）。

創設5年目となる2012年度に、児童教育学科では教育課程の大幅な変更が行われ、それに伴って「スタートアップセミナー」の具体的達成目標及びシラバスも改訂された。

2012年度に改訂された児童教育学科の「スタートアップセミナー」の授業の趣旨と具体的目標は、本学の初年次教育としての「スタートアップセミナー」のねらいを核としながら学科独自の課題を加えたものである。すなわち、本学の一員としての帰属意識を高め、建学の精神に沿った人間育成を行うと同時に、児童教育学科の教育目標に対する理解を深めさせること、そのための活動をととして、学生相互の人間関係を強め、有意義で健康的な学生生活を送るために必要な基礎的・実践的な習慣や態度を熟成することである。

1.4 児童教育学科の「スタートアップセミナー」の内容

児童教育学科の「スタートアップセミナー」の授業内容には以下のような4つの柱があり、これらを含めてシラバスが作成された。

- 1 建学の精神、基本理念にかかわる活動
- 2 学生生活のライフプラン・キャリアプラン
- 3 学びのスキル
- 4 児童教育学科の特性理解

これらの目的と内容を要約すると、「1. 建学の精神、基本理念にかかわる活動」とは、建学の精神を理解しそれを体現するための活動である。学生は建学の精神「あてになる人間の育成」についての講話を聴く。そしてこれを具体的に実践する試みとして、在籍4年間にわたり継続して行うことができる社会貢献活動（ボランティア活動など）をプランニングして実施する。授業時間内にはプランの作成と検討（簡単な報告）を行い、実際の活動は空き時間や休業日などを利用して実施していく。

「2. 学生生活のライフプラン・キャリアプラン」の目的は、学生がポジティブな自己理解を深め、将来の夢へのプランニングや今後取り組むべき課題を明らかにすることである。内容は、3回に分けて自己理解や今後の課題に関する400字の作文を3回、共に推敲しながら完成させる。これを「私400」と名付けた。また基礎学力を確認することも目的である。

「3. 学びのスキル」では、社会環境に関する理解の促進とプレゼンテーション技術の向上を目指す。そのため、社会的なテーマについて2～3人のグループで調べて、グループ対抗のディベートを行う。

「4. 児童教育学科の特性理解」では、学生一人あたり2～3人の学科教員の研究室を複数の学生とともに

に訪問して、教員との対話を通してその専門分野について聞き取り、これを各チームに持ち帰り報告しあう。また「学習指導要領学習会」として学習指導要領の音読や要約を行い、小学校ではどのような教科・領域で何を学ぶのかを概観する。この2種類の活動を通して学科の学びの特徴を理解し、3年時のゼミ選定の資料とする。なお、実際の授業を進めるにあたっては、本授業の趣旨と目標を効果的に実現するために主に次のような方法を取り入れた。

- ① 新入生100名を6チーム（各約15名）に分け、各チームに全専任教員を2、3名ずつ配属した。1人が主に担当し、残りの教員がこれを補助した。授業は一回90分で15回。使用教室は演習室。
- ② 主担当教員は、学科で作成した統一シラバスと＜教員マニュアル＞の冊子に基づいて授業を進行させ、必要に応じて補助の教員がサポートする。各チームの主担当教員6名はマニュアル実施にあたって適宜打ち合わせの時間をもった。
- ③ 各回の授業内容は学科で決めた統一シラバスをもとに主担当教員がリードするが、チームの具体的な活動は学生委員を決めて学生を中心に進めた。
- ④ 90分の授業時間のなかでの各活動の割り振りは、導入のアイスブレイキング（主に部屋の美化活動）に続いて各活動（プログラム）を2～3種、それぞれ10分から20分程度行う。最後に次回の予告を行った。
- ⑤ 各活動を展開するにあたっては、学生同士が相互交流するよう発表や報告の機会をもった。
- ⑥ 2つの活動において、チーム間で点数を競うゲーム的な要素を取り入れ、授業への動機づけやチーム意識が高まるよう配慮した。授業の最終回は「成果発表会」とし、優秀チームや作文の優秀作品を発表、賞揚した。
- ⑦ 主担当教員間で連絡を密にし、各チームの授業内容および進度がほぼ同じになるよう配慮した。

1.5 本研究の目的

2012年度に改訂されたシラバスと新しい方法によって実施された児童教育学科の「スタートアップセミナー」は、受講した学生たちに実際にどのように受け止められたのだろうか。授業の新たな計画や実施に参画した筆者らにとって、学生たちがこの授業で何を学んだのか、この学びが以後の大学生活にどうつながるのかを明確にしたいところである。そこで本研究では、2012年度4月からの15回の授業の、学生にとっての意味を検証する。それによって、次年度以降の児童教育学科の「スタートアップセミナー」の内容や実施方法等を改善する資料を得たいと考える。

2 方法

「スタートアップセミナー」の受講生（児童教育学科1年生全員100名）のなかからほぼランダムに男女4名ずつ計8名を選び、「スタートアップセミナー」に関するインタビュー調査を行った。授業評価を測るには質問紙調査が一般的であるが、ここでは、受講した学生が何をどのように学んだか、幅広くまたより深く捉えるために質的な調査方法を用いた。具体的な方法は以下のとおりである。

被調査者の選定方法：授業は6チーム編成（6クラス）で実施された。そのうちの4つのチームから其々学籍番号の若い男子学生と女子学生を1名ずつ選出。

インタビュアー：被調査者のチームの主担当教員である筆者4名。

調査時期：2回目の授業終了直後、9回目の授業終了直後、及び15回目の授業終了直後の計3回。

所要時間と場所：1人につき1回20分程度。学生の都合の良い時間に主担当教員の研究室に来てもらい、個人面接調査を実施。

調査内容：3回とも同じ質問で、授業において継続して2回以上実施した代表的活動（プログラム）につ

いて意見や感想を求めている。具体的には以下の①～⑥の項目について質問した。①全体の感想、②社会貢献活動のプランニング、③学習指導要領学習会、④ディベート、⑤作文「私400」、⑥その他。

インタビュー形式：半構造的面接。各回ともインタビュアーが「（項目）〇についてどう思いますか」と計6問質問した。被調査者の回答が短い場合は、「もう少し詳しく」「それはどうして？」など発言を促し、被調査者が、自由な雰囲気の中で6項目について合計20分程度は話をするよう誘導した。

記録方法：被調査者の了解を得て面接の様子をICレコーダに録音した。

逐語録の作成：1人につき計1時間（20分を3回）の音声記録8人分の逐語録を作成した。

逐語録の整理の方法：逐語録から、各活動（プログラム）に対する意見・感想とそのような感想を持つに至った理由に関する発言を抽出し、発言の意味するところを踏まえて表現を要約する。その結果をもとに、授業のねらいと被調査者の捉え方の対応、被調査者間の違いなどを比較検討する。

表1 全体について

	インタビュー1回目	インタビュー2回目	インタビュー3回目
A	大学で初めての仲間みたい。 仲がいい友達が増えそう。	他のグループの人とも交流をもちたい。	グループのメンバーと結構親しくなることができた。 結構ためになった。 やってよかった。 来年も続けてほしい。
B	楽しい。 他の授業のように眠くならない。 交流の場みたい。 いろいろ大変そうだけど、自分なりになんとかやろうかと。	考えることが難しい。 時間的な流れ、制限にはついていける。	グループメンバーの女の子とは他の講義でも交流がある。 ためになった。 もっと頑張りたい。
C	他の授業に比べて全然堅くないので、すごく楽しかった。 楽しくできそう。本当にチームに入ってよかった。 副委員長になったので頑張ろうと思う。 内容がたくさんあるが、そんなに苦にならない、全然大丈夫。	他の人とコミュニケーションをとるのが多くて、大学生っぽい。 いい印象。	大学生っぽい。 話しあったり協力したりが多く、結構飽きずにやれて楽しかった。 いろいろなことがやれたから、マンネリ化しなかったし良かった。 グループ的な人数がよかった。
D	グループ分けは、出席順じゃない方がいい。半分からこっちの人とは関わりが本当じゃないから。 席替えはないのか。	他の授業の息抜きになっている。他の授業は書いたりするのが多いからちょっと疲れてくる。 席替えがあった方がいいかと思う。他の子のことも知りたいし 社交性を身につけるうえでも必要かなと思う。	1年生のうちから、教員採用試験に関する様々な基礎段階のことを学べた気がする。 春学期、これだけやればいい。
E	少ない人数でやるのでコミュニケーションが取りやすく楽しい。 知らない人だけど協力してやっていくうちに仲良くなれそう。 初めてのことばかりで楽しさと不安と両方ある。	協力してやるのはいいと思う 仲良くない子とも話せる。 Eさんとディベートで仲良くなった。 発表だなと思うと緊張する。他の授業は座っているだけだから。	皆のままで発表する場をいっぱい持っていて、いい勉強になった。 ディベートが印象に残った。
F	楽しそう。 すごく学べる 幅広くという意味でいいなと思った。	学習指導要領、皆ちゃんとやっているからいいかな。 こういう授業は教師になるうえですごく重要 特に1年の時からやった方がいい。	協力してやるとか競い合うとか良かった。 チームが賞をとってよかった。
G	楽しそう。 知らない人と出会えたし、少人数だから普段は話さない子と話せる。 プログラム、早くやりたい。	結構楽しい。 予定がバババ。	楽しかった 皆と話しているとき。
H	皆、学んでる感があっておもしろい。 苦手なプログラムが組まれていることはありがたい。 話したことない人ともしゃべれる機会が増える。 少人数なので友達ができやすい。	楽しい。皆でやる感じが。	友人関係が楽しかった。

3 結果と考察

3.1 「スタートアップセミナー」への意見・感想

被調査者ごとの3回のインタビューの逐語録から、各活動（プログラム）に対する意見・感想とその理由に関する発言を抽出し、その意味するところを踏まえて発言を要約した。表1～表5は、これをプログラム種別に一覧表にしたものである。表中のA～Hは8名の学生個人を識別する記号である。これらの表をもとに、被調査者の意見・感想を主に、(1) 肯定的か否定的かの評価に関する意見、(2) 改善や検討を要するという意見、という2つの観点から整理し考察する。なお、以下の表記において、例えば【A2】とは、各項（プログラム）に該当する表における【学生Aの2回目の意見】を表す。

3.1.1 「スタートアップセミナー」全体について

前ページの表1を見ると全体的な感想として、6名が「楽しい」と述べており、否定的な意見を述べるものはいなかった。

具体的には、被調査者全員から「友達作り、コミュニケーションの場としての期待・効果」に関する肯定的な感想がきかれた。さらに友達づくりをすすめるための提案【D1；A2，D2】もあった。内容についても、全員から「学びへの期待・意欲」、「交流・協力による学習形態」に対する肯定的な意見が、直接的・間接的に語られた。

3.1.2 社会貢献活動について

表2に見るように、被調査者全員から「ボランティア活動は必要であり、よい機会」との意見が聞かれた。その他、以下のような意見があった。

- (1) 肯定的な意見
 - ① 他の学生の発表からよい刺激をうけたとの意見
【E2，F2；A3，C3，D3，E3，F3，G3，H3】
 - ② 具体的な計画の進行や意欲の向上を示す発言
【A2，C2，D2，F2；A3，C3，E3，F3，H3】
- (2) 改善や検討に関する意見
 - ① 計画や実行の難しさに対する指摘や提案

表2 社会貢献活動について

	インタビュー1回目	インタビュー2回目	インタビュー3回目
A	将来のため、ボランティア活動を通して人と接する経験は重要。	小学生の学習指導に参加予定。 いい機会になるかと思い申し込んだ。	子どもの接し方や教え方、子どもとの輪を広げたい。 皆の報告を聞いて、自分もこういうことをしたいという意識づけのきっかけの場になった。
B	4年間続けることができる計画を立てるのは難しい。 ボランティア経験はない。	考え中 地域のボランティアは朝が早いから無理。	手伝ってほしいと言われて募金活動に参加した。 インターネットで調べたが、締切がすぎていて見つからなかった。 自分がいかに社会貢献していないかがよくわかった。 今までの自分を振り返るために、今回の機会があってよかった。 活動に参加して、自分が何を目標として実施しているのかはまだ見えてこない。
C	自分だけだとやらないし、面接の時とかに言えるのいいと思った。	学校の企画としてやったら面白いと思う 個人で行くのではなく。 子どもが好きなので子どもと触れ合うのがいいかな。	本当にみんなやるのかなと正直思っていたが、結構、みんなしっかりやってくれるんだと。 一応計画したからやろうかな。 面接とかで言えるのいいと思う。
D	これまでもやってきている。今年もやろうと思っていた。 強制的にボランティアさせるんだと、びっくりした。 経験のない子にとっては、必要。	これ以外にも、個人的に参加していきたいと思っている。	普段ボランティアに行かない人もこういう機会であることは、最後に振り返れば、いろいろ実があるのではないかと。 自分の知らないボランティア活動を他の人の発表で知ることができて、興味や関心をもつものもあった。 実行できていない人は、そのままになってしまうので、振り返りの紙を配って書かせるのもいいのではないかと。
E	やったことない。 自分からはやらないのいいと思う。自分の知らないことがいろいろあると思うから。	発表を聞いていいと思った。 何をやるか決めていない。他の人の発表を参考にしたい。	まだやっていないが、毎週のように行っている人の話を聞いて参考にしたい。 積極的に行けたらいいと思う。
F	決めてから行動に移すのに時間がかかるかも。 決めたら前の週にやる事など段取りを決めてやると良いと思う。 何をしたらいいか思いつかない。	自分からはしないが、ボランティアは人生の中で絶対にやった方がいいので、機会を作ってやるのはいいこと。 ある人は田植えのボランティアだったがすごくよかった。 自分も公民館に行ってみよう。	自分の計画はこれからだが、勉強になるし、楽しみ。 T君の発表はすごいと思った。
G	ボランティアに行くというのがいい。 若干強制だけど、後は一人自由というのがいい。自分からはわざわざ電話してまではやらないから。	いいと思う。	まだ決まっていない。 皆の発表を聞いてそんなのできるんだって驚いた。 ボランティアってよくわからない。 団体の活動ならしたいけど、個人でゴミ拾いとかは嫌。 大変だけど楽しい系がいい。
H	やりたいと思っていたのでちょうどいい。	ボランティアはしたいが、決めるのが大変。探るのが大変。	早くやりたいと思う。皆やっているのだから。

【B 1, F 1 ; C 2 ; B 3, D 3】

(2)①については、社会貢献活動に関する情報入手の方法、ボランティア先や活動の例、電話のかけ方など、実際の活動に入るまでの手順が十分理解されなかったためと考えられる。あるいは説明が不足していたかもしれない。必要な資料を配布し、より詳しく説明することで改善されるだろう。

3.1.3 作文「私400」について

表3に見るように、作文に関して、5名が技術的な視点から何等かの意義・効果を示す意見を述べた。また、時間・字数については、適当【C, D】、不適当【A, B, F】との意見が出された。

2つの観点別に具体的に整理すると以下のような意見が見られた。

(1) 肯定的な意見

① 将来のことを見つめるよい機会であったとの意見
【C 2, D 2, E 2 ; E 3, G 2, H 3】

(2) 改善や検討に関する意見

① 自分や将来のことを書くのは難しいとの感想
【F 1, H 1 ; B 2, F 2, H 2 ; H 3】

② 各回のテーマに重なりがあり、書きづらいとの指摘
【C 3, D 3】

(2)②については、その意義が十分に理解されなかつ

たようである。各回のテーマに込められた独自のねらいとその関連性を明示し、それを意識させながら各回の構想と執筆を指導していく必要がある。

3.1.4 ディベートについて

表4に見るように、ディベートに関しては、1回目で前向きな意見とともに不安を述べたもの【A, H】がいたが、3回目では、全員から何等かの意義・効果を示す発言が聞かれた。

また、観点別に整理すると以下のような意見が見られた。

(1) 肯定的な意見

① チームで協力することの良さ

【B 2, H 2 ; C 3, G 3, H 3】

② 難解なテーマに取り組む意義・効果

【D 2, F 2 ; D 3, G 3, H 3】

(2) 改善や検討に関する意見

① 難解なテーマに対する否定的意見

【E 2, G 2, H 2 ; A 3, C 3】

② 団体戦による人間関係への影響

【A 2, G 2 ; A 3, G 3】

(2)①について考えると、ディベートでは社会環境に関する理解の促進とプレゼンテーション技術の向上の相乗効果をねらったものの、テーマが難解すぎたこと

表3 「私400」について

	インタビュー1回目	インタビュー2回目	インタビュー3回目
A	作文は苦手意識が強い。		作文を書かせる練習としては良いと思う。 文字数を増やした方がよい。 自分の伝えたいことから外れてもいいから書く練習をした方がよいのでは。
B	テーマに対して、書けるだけ書くというかんじ。	テーマが難しく、時間がなくて、400字に収めるのが難しかった。	時間が短くて大変だった。 中学の読書感想文までしか書いたことがなく、原稿用紙の書き方を忘れていた。
C	別に。そんなにいやだなとは思わなかった。	自分が今思っていることを再確認できるので良いと思う。 400字は多すぎず少なすぎず書きやすい。	作文の書き方、添削があったのでよかった。 400字はちょうどよい感じで書きやすかった。 テーマが2回目と3回目がかぶって書いて書きづらかった。
D	暗い生い立ちだったらどうするんですか。	小論文風に書くのか作文風に書くのかわからなかった。 「自慢すること」ってあまり書けなかった。 自分を見つめなおす良い機会になった。 400字でまとめるのは大変だったが、そのノルマがあるから頑張れる。 適量。	「未来に向けて」と「30歳の私」の違いがよくわからなかった。 テーマがダブっているので書きづらかった。 ボールペンで清書させる練習は、きれいな字を書く練習になった。
E	文章力がないから、ありがたい。作文は苦手だけど。	自分を見直すみたいで考えさせられた。 人生は甘くないけど理想を書いた。頑張ればできるかなと思って。	表彰式で聞いた発表では、とても具体的な内容で、人の考えが聞けてよかった。 将来の自分のことを考えられてよかった。
F	楽しみでもあるが、自分のことを書くのが難しそう。 自分から見た自分を書いて、そんな人だったんだと言われると考えるとしまうだろう。	400字は短くて難しい。 自分のことを書くのも難しい。人に読まれるし。	よかった。 3回の内容的なつながりを書いた。 表彰された人の内容は具体的にすごかった。 表彰するのはよかった。
G	書くのはうまくないが、とりあえず書くだけなら。 テーマは大丈夫。	何とも思わない。 普通の作文。	普通に。文章力ついたらとは思わない。 内容はいいと思った。書いているだけで〜したくなった。今の興味を将来と結びつけて考えられてよかった。
H	作文は苦手ではないけど、自分のことを書くのはあまり得意でないので大変だなと。	難しい。 30歳まで考えたことなかったから相当考えた。	難しかった。 教師になるまでは考えていたが、30歳までは考えたことなかったから、考えるきっかけになった。

表4 ディベートについて

	インタビュー1回目	インタビュー2回目	インタビュー3回目
A	初対面の人と話すのは苦手。 消極的な方なのでうまくできるか心配。 乗り越えないといけない壁だから前向きに頑張りたい。	チームメンバーが積極的に討論をしてくれなかったから、イライラした。 途中から自分が変わって討論した。 相手チームの討論内容は意味不明だったのに、話し方に勢いがあつたため、学生の票が入って負けたのが悔しかった。	1回目、チームメンバーのせいでうまくいかなかったので、2回目は休んだ。 世界的なテーマに触れるのも重要だと思うが、もう少し簡単なテーマの方がよい。難しすぎるとディベートにならない。 言い合う力や話し合う力がつけられたと思う。
B	ディベートは未知なかんじ。 討論の場では意見を突っ込めないところがあり、大抵聞き役。	相手側の言い分に逆らえず大変だった。 自分の意見を言うのは苦手で難しかった。 チームメンバーには討論では助けてもらった。	1回目の敗因は相手の意見に対する意見が思いつかなかったから。 2回目の反対尋問はできそうにないので、メンバーに任せた。 自分の力量不足 もう少し詳しく調べた方がよかった。 ディベートの形式がわかった。
C		楽しい。 その場で思ったことをいうのや言い合いを見てるのも楽しい。 反論とか、特に完璧じゃないとすごいおもしろい。 パワーポイントを使うのが今時っぽい。会社でもよく使うと聞いたので、使った方がいいと思う。	大学生っぽい。パソコンを使うことと、学生同士が話し合って、活動的なかんじが。 ディベートは良かった。 テーマが難しかったので、調べてからやらなといけなかった。 聞いているときに何を言っているのかわからないところが多かった。 インターネット、パワーポイントを使うようになった。 (対抗戦形式に関して)ただやるだけだとやる気でないから良い。自分の班は、丸いかんじて楽しかった。
D		調べるのが大変。 否定側の資料があまりなく、大変だった。 かなり難しい題だった。教育に関わる人間だから、ということだろうと思った。 深く考えることができたので、このような問題で良いと思う。 話すことが苦手な子は、こういう機会で経験を積むことができたのではないかな。 賞品がもらえる制度はいいと思う。やりたくないと思って何かもらえるとと思うと。	集団討論の練習になったかなと思う。 1年のうちからやる意味はあると思った。 授業外で活動する時間が長いので、自主的に行動する面がそだてられたのではないかなと思う。 否定意見の情報があまりない題だと、考えるのが難しかった。 自分が調べたこと以外のことも知れて、いい形だった。
E	小中で経験がある。 いろんな意見が聞けるので良いと思う。	資料作りは大変だった。 自分達は強く主張できてよかった。 R君の主張がうまく、説得力があった。	すぐに考えて答えを出ところが、面接の練習になったのかなと思う。 他の人を見て、自分は知識が足りない、新聞を読むなどの努力の積み重ねがないと思った。
F	身近な人が発表するのは興味がある。 どんな調べをしたか、皆がちゃんと見るので楽しみ。 パワーポイントを作るところが楽しみ。音や絵を入れて、皆に興味をもってほしい。	テーマが難しく、時間がかかった。 調べていない人より理解できた。	難しかったが、意見が言えるところ、人の話をちゃんと考えてきけるところはいい。普段は手を挙げて意見をいうこともないから。
G	楽しみ。恥ずかしいとか意見を言わないとかないメンバーだから。	嫌だ。テーマが難しくすぎて身近じゃないから、(賛成反対の)どっちでもいいしって。 他のチームと戦うのが嫌。言い方がむかつくとか、ちゃんとやってくれないとか、悪いと探してみたいになる。 賛否に振り分けられるのも嫌。そこまで興味あることでもないのに反論するの嫌。	担当した社会問題にちよつと愛着がわいた。全然知らなかったけど、知って。 ディベートの相手でひどい気まずくなった子がいる。相手はどう思っているかわからないけど、怒らせちゃったかなと。 最下位だったけど、皆でできたからいい。静かなタイプのJ君と話ができたり、仲間で調べものしたり。
H	苦手なので、勇気を振り絞って頑張ろうと思った。 教師になったらそういう機会が増えるので、ハキハキと言えるようになりたいと思った。	なかなか大変。班で作るのは皆で協力し合えるが、内容が難しいから。 ディベート自体はいやではないけど、辛いなと。 すぐに頭の中でまとめたりして、頭フル回転というのが疲れる。	資料を作ったり協力するのはおもしろかった。大変だったけど。 扱ったテーマがニュースで出ると、なんとなく見るようになった。 人前で話すのは嫌だと思っていたが、意外といざとなるとやるしかないと思えるんだって思った。

で、両方ともが到達目標に達しなかったという印象がある。それぞれの到達目標を達成させるためには、テーマをより身近なものにするなどの検討が必要であろう。

3.1.5 学習指導要領学習会について

表5に見るように、被調査者全員から、学習指導要領を勉強することについては「やらなければならないから、いい機会」等、意義や意欲に関する発言が聞かれた。

学習会については、観点別に整理すると以下のような意見が見られた。

(1) 肯定的な意見

① 団体戦を意識した意見【G 2, H 2 ; E 3, H 3】

② 他学生、協力関係の影響

【F 1, H 1 ; B 2, D 2, E 2 ; E 3, H 3】

(2) 改善や検討に関する意見

① 教員の関与を求める意見【C 2 ; A 3, C 3】

② 勉強会の方法・必要性に関する疑問

【C 2, G 2 ; A 3, D 3, G 3】

③ 時間が短い【D 1 ; C 2】

(2)①②③については、学習指導要領の自主学習と学習会及びその関係の捉え方に学生間で差があったように思われる。自主学習を計画的、促進的にするための学習会であるとのねらいを共有しながらすすめていく必要があるだろう。また、教員の関与としては、効率的な学習会の方法について例示することなどが考えられる。

表5 学習指導要領学習会について

	インタビュー1回目	インタビュー2回目	インタビュー3回目
A	将来のために、今から勉強しないと後々困るから、いい機会。	勉強会は学習指導要領を勉強するきっかけにはなっているが、興味ある科目と担当教科しか現在は読んでいない。	学習指導要領に触れて、まあ、良かったと思う。 第一ステップになった。 試験結果が悪かったので悲しい。 勉強会ではあまり勉強できなかった。やる気のない学生達でもできるような時間を作ってほしい。
B	学習指導要領には無理難題なことが書いてある。低学年に教えるには無理。	勉強会の時に一番真剣に読んでいる。 勉強会以外で、担当外の教科は読まない。 担当教科の資料作成は穴埋めにしたと考えている。勉強になると思う。	自分では勉強はしないから、勉強する時間としては、今回の機会があったよかった。 試験結果が気になる。
C	授業であまりかかわっていないのでよくわからない。 授業中に勉強会をするというのはいい。	ぶっちゃけ意味はあるのか。 俺らに任せて大丈夫かなと。 時間も短い。 自分が担当したところは穴埋め式問題を作ったから勉強になったけど、他のところは読むだけだから頭に入っていない。 堅い。だんだん、皆目標を読むだけになってきた。	自分はあまりやってなかった。 ここを覚えてくれば点数がとれるとなるとやる気であるが、この中からどれかであるというのはちょっと。 学生が問題を作るの、自分が担当したところは良いが、先生に重要なところをピックアップして作ってもらいたかった。 軽く触れてみるという意味ではいいと思う。
D	自主学習の上で、皆で内容を確認するという場だから、あった方がいいと思うが、時間が短い。 一人でやっても気づかないところがある。 あまりやらない人にとってはすごく意味があるものだと思う。	普段あまり見る機会がないので、いい機会になっている。 自分では時間がないのでその場をつくってもらってありがたい。 他の子がレジュメ作成や説明してくれるのでとてもありがたい。自分では気づけないところも説明してくれる。	ひとつひとつは短い時間だったが、すべてに目を通すことで、今からやることの見通しがついた。 レジュメは効果的だったのもあると思う。 配って、読んでおいてくださいというのもあったが、それはどうなんだろう。
E	いろんな人の勉強の仕方を聞くことによって自分に合ったやり方がわかるからいい。	S君の発表はすごい。参考にして勉強したい。 自分達も準備すればよかった。	1年生のときから勉強するのはいいと思う。 皆、レジュメ作ってきてわかりやすかった。 自分はテストがあまりできなかったが、結果発表を聞いて、皆に助けられたと思った。 テストの結果を知りたい。
F	(勉強会の方法について)積極的に意見が出て助かった。 勉強してきて、わかりやすく伝えたいと思う。	教職の授業で覚えなければならないことと一緒なので、教科の順など、覚えられてよかった。	よかった。 他大学の友人もやっていた。 1年の間はずっとのびのびしたいと思うが、受験勉強みたいにやっている子もいた。 2年生がうらやましいと言っているのを聞いたらよかったのかなと思う。
G	辛いけど、やらなければいけないから、いい機会になる。	うちのチームのやり方はいまいち。自由なので話してしまったり、他のグループに比べてうちは大丈夫かなと。 嫌だけどやらなきゃという気持ちがちよとある。	勉強会としてはよくなかった。いらない。結局、自分で勉強したから、あの時間はしゃべってた。直前は皆すごくやったけど。 思ったよりできた。やればできるな、と。 良い教材が見つけられた。
H	大変そうだなと。 やらなきゃいけないのでやる気出た。 クイズ形式でやることになったので、ちゃんとやらなきゃと。	覚えることが多すぎて、勉強が大変。 クイズを出し合うやり方はいいと思う。 チーム対抗は嫌。足をひっぱらないか。でも団体の方がやっぱり頑張れるかな。さばれないし。	うちのチーム、頑張ったなと。自分もそれなりに。 皆で問題を出しあった方が皆勉強するからいいと思う。

3.1.6 その他という項目について

インタビューの最後に、その他という項目を設けたが、あまり言及しない被調査者が多かったので表にはまとめていない。その他で目立った発言は、部屋の美化活動の必要性や方法についての疑問や改善を求める声であった。これは、授業の初めにアイスブレイキングとして全員で10分間、使用教室を化学ぞうきんで美化する活動であるが、一部に、意義の検討や方法における改善が求められていることが分かった。

3.2 授業のねらいをどう受け止めたか

児童教育学科の「スタートアップセミナー」は、本学の一員としての帰属意識を高め、建学の精神に沿った人間育成を行うと同時に、児童教育学科の教育目標に対する理解を深めさせること、そのための活動をとおして、学生相互の人間関係を強め、有意義で健康的な学生生活を送るために必要な基礎的・実践的な習慣

や態度を熟成することであった。そのため、4つの活動の柱を立てて、個々のねらいを実現すべく授業が展開された。

インタビュー調査の結果を総括すると、授業の中心となる4つの活動については肯定的な意見が多く、被調査者たちが今後もこのような内容と形態で「スタートアップセミナー」を継続して実施していくことを支持していると考えられる。また、その支持は、表1～表5の具体的な発言に示されているように、それぞれの活動の趣旨やねらいをある程度受け止めての実質的な支持であると思われる。

ただし、要望や検討を要する指摘も多い。発言の中でも「ディベートのテーマが難解である」、「(作文の)テーマに重なりがあって書きづらい」、「(学習指導要領の)勉強会の必要性がわからない」などの意見は、各活動における趣旨やねらい、具体的な方法についての説明が十分理解されていないために出てきたものの

ようである。担当者側は説明したつもりでも学生に届いていない可能性があることに気づかされる。次年度以降の計画や実施にあたっては、一つ一つの指摘を十分検討し、すべての学生が活動の趣旨や具体的方法を理解できるよう、説明の明確化、資料の配布などの効果的な方策を採り、より満足度の高い授業を実施する必要があるだろう。

4 今後の課題

初年次教育は今や拡大と普遍化のステージにあり、専門分野や大学の類型別のプログラム開発が課題となっている（山田、2012）。すなわち専門教育に対応した初年次教育が今、求められている。

このことは、児童教育学科の「スタートアップセミナー」の課題でもあると思われる。児童教育学科が改訂した「スタートアップセミナー」のシラバスも、学科の教育目標（大学生としての適応および学校教育に関する知識と技能の習得）に焦点を合わせて計画し実施してきたが、十分に専門教育の基礎や準備としての活動となっているかどうかの検証はできていない。児童教育学科の特色に応じた初年次教育の内容や方法を今後さらに追究すべきであろう。

また、今回は学生の感想を調査したが、担当したすべての教員の意見や感想を捉えていない。授業は学生と教員で作上げるものであり、学生の要望や満足度を肌で感じている教員の声を取り入れて検証し、今後の活動を計画していくことも課題の一つである。また、感想等のデータ分析の方法も改善する必要があると考える。

謝辞

インタビュー調査では児童教育学科1年生8名の協力を得ました。また「スタートアップセミナー」の授業内容は、児童教育学科教授三島浩路先生をはじめ多くの方のご尽力のもと作成され、授業は児童教育学科専任教員全員によって担当されています。関係の皆様には厚くお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 中部大学現代教育学部スカイアップ委員会（2009）中部大学現代教育学部における初年次教育（スカイアップ・プログラム）実践一年目の報告
- 中部大学現代教育学部スカイアップ委員会（2010）中部大学現代教育学部における初年次教育（スカイアップ・プログラム）実践2年目（平成21年度）の報告
- 中部大学現代教育学部スカイアップ委員会（2011）中部大学現代教育学部における初年次教育（スカイアップ・プログラム）実践3年目（平成22年度）の報告
- 中部大学現代教育学部スカイアップ委員会（2012）中部大学現代教育学部における初年次教育（スカイアップ・プログラム）実践4年目（平成23年度）の報告
- 中部大学全学共通教育部初年次教育科（編著）（2012）大学で学ぶスタートアップセミナー参考テキストーナカニシヤ出版
- 濱名篤・川嶋太達夫（編著）（2006）初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向 丸善株式会社
- 早矢仕彩子・太田伸幸（2009）中部大学現代教育学部初年次教育プログラム（スカイアップ・プログラム）初年度の試み 現代教育学研究紀要 第2号 Pp.1-12
- 隅谷三喜男（1981）大学で何を学ぶか 岩波書店
- 杉谷祐美子（2006）日本における初年次教育の動向 濱名篤・川嶋太達夫（編著）初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向 第5章 Pp.69-79 丸善株式会社
- 高松正毅（2008）アカデミック・リテラシーからスタディスキルズへ、さらには初年次教育への展開 高崎経済大学 平成18年度特別研究報告書 大学全入化時代におけるスタディ・スキルズ教育に関する基礎的研究 Pp.97-103
- 山田礼子（2012）学士課程教育の質保障へむけて 学生調査と初年次教育からみえてきたもの 東信堂

教 授	現代教育学部	児童教育学科	吉田 直子
准教授	現代教育学部	児童教育学科	古市真智子
助 教	現代教育学部	児童教育学科	味岡 ゆい
准教授	現代教育学部	児童教育学科	長尾 寛子